

徳田の歴史-11

ほら貝(法螺貝)

1/1



ほら貝

昭和初期頃(詳細年不明)より徳田地区に伝わっている“ほら貝”と呼ばれている楽器があります。これは巻貝の貝殻を楽器として使用しています。作り方は貝の先端を4~5cm削り、中の身を取り出して口金を接着剤で固定し、加工したもので吹奏楽器の一種です。これを吹くと低音で、太く(ライオンの吠えるような声に似ている)大きな音がします。

現存するこの楽器の大きさは長さ約 40cm、最大太さ 56cm、重さ 1.2kg です。

● 当時この“ほら貝”はどのように、何に使われたのですか

徳田地区の中央の通り(現在の県道 54 号)を地区代表(瀬古長)の人が歩きながら吹いて主に下記のような事を知らせていました。

①水害等で堤防が決壊又はその恐れがある時

(徳田地区には中ノ川と北川の2大河川が東西に流れています)

②地区全体の突発的な連絡、招集

③その他の緊急時

※現在ではメディアの進歩等で迅速に、タイミング良く、正確に知らせる事が出来るようになったのでこのような“ほら貝”による合図(連絡)は次第になくなり、今は飾り物として大切に保管、展示されています。

<参考>

“ほら貝”は既に平安時代から存在していたようで一般的な使い方としては、特に戦国時代には戦陣の合図や戦意高揚のために使われており、山伏もこのような貝を吹き山野で修業をしていたそうです。

以上は地元年配者の話を参考にしました。

H.A